IWC 2014

FUKUOKA
TROPHY
Honjyozo
SOUDEN

ＩＷＣは1984年に設立され、世界のワイン・ジャーナリズムをリードする世界最大規模・最高権威に評価されるコンペティションで、SAKE部門は2007年に創設されました。
「大吟醸 極醸 喜多屋」は2013年のSAKE部門583銘柄の中から、第１位の「チャンピオン・サケ」を受賞しました。
「本醸造 蒼田」は2014年の「トロフィー」を受賞。トロフィーは全出品数725銘柄の中から17銘柄に与えられた、チャンピオン・サケに次ぐ賞です。

2014年
「喜多屋 新酒祭り」
のご案内

●日　時：11月 9 日（日）10:00～16:00
●会　場：喜多屋（八女市本町374番地）
●入場料：1000円　純米吟醸・純米酒の搾りたて生酒をお好きなだけお飲み頂けます！！

手びねり 特製 グラス付

※IWC2013チャンピオン・サケ「大吟醸 極醸 喜多屋」の新酒をショット販売致します（数量限定）

株式会社 喜多屋
http://www.kitaya.co.jp
福岡県八女市本町 374 番地
電話 0943-23-2154

蔵内 大杉玉の差し替えも行います。

【喜多屋 トップは語る】

日本人と和み
～和みのひとときを贈る～

喜多屋 代表取締役社長 木下 宏太郎（きのした こうたろう）さん × 歌手 加藤登紀子（かとうときこ）さん

こだわりの思いが奏でる、和みの時間

世界的に権威があるワイン品評会「ＩＷＣ（インターナショナル・ワイン・チャレンジ）」でチャンピオン・サケを受賞するなど、世界が認める日本酒と本格焼酎を手掛ける福岡県八女市の蔵元、喜多屋。同社の木下宏太郎社長と、日本酒を飲みながら楽しむ「ほろ酔いコンサート」を毎年開催し、間もなくデビュー50周年を迎える歌手の加藤登紀子さんが、和みをテーマにお酒と歌について語り合った。

飲んでくれた方の笑顔が一番の喜び

1962年福岡県八女市生まれ。東京大学農学部卒。酒造メーカーに就職後、92年に喜多屋入社。同年4月から94年6月まで国税庁鑑造試験所で研修、95年1月から同社専務取締役に。99年、喜多屋7代目の代表取締役社長に就任。現在、福岡県酒造組合副会長、日本酒造組合中央会評議員、本格焼酎事業協同組合理事を務める。

出会いへの思いを込めた百歌百会

1965年東京大学在学中、第2回日本アマチュアシャンソンコンクールに優勝し歌手デビュー。66年「赤い風船」でレコード大賞新人賞、71年「知床旅情」でレコード大賞歌唱賞など数々の賞を受賞。以後、70枚以上のアルバムと多くのヒット曲を世に送り出してきた。2011年東日本大震災後、度々被災地を訪れ避難所でもLiveを行っている。

本の文化が激動する中で50年歌を歌ってきました。日本酒という長い歴史と伝統の中での20年の挑戦は、また重みが違います。いろいろな思いがあっての今だと思うのですが。

木下　私は32歳のときにC型肝炎を発症していることが分かり、12年間お酒を飲むことができませんでした。その間は体も無理が利かず、制約が多い中での仕事でした。肝炎が治ったからそのチャンピオン・サケを受賞するお酒が巡れたのですが、逆にその闘病経験がなければ到達できなかったかもしれないと感じます。喜びも苦しみも受け止めて、たくさんの人たちと気持ちを分かち合うことができるようになったからこそ、あのお酒が生まれたのでしょう。

お酒が人の距離を近づけ和みの時間が生まれる

木下　病気を経験して、人の心を優しくしてくれるお酒が造りたいと思うようになりました。まあるくてふわっと膨らむような、人を和ませるお酒です。私個人にとっても、家族や友人など大切な人とお酒を酌み交わすときが和みの時間ですが、加藤さんにとって和みの時間とは？

加藤　私は人と抱き合うのが好きなんです（笑）。歌いながら客席の方々と心の中で抱き合うこともあるし、お客さまと実際に抱き合うこともあります。歌った後だと体温も高くて、抱き合っても違和感がないんです。その方がお互いの関係がずっとうまいく。それが私にとっての和みですが、それと同じことが、お酒を飲んだときにもありますよね。

木下　お酒を酌み交わして、語り合う時間が、お互いの距離を近くする。歌もお酒も人の心を和ませてくれるものですね。

10月14日、ビルボードライブ東京（東京都港区赤坂）で行われた加藤登紀子さんの50周年記念パーティーへ木下社長もお祝いに駆け付けた

和みを届ける仕事に引退という言葉はない

木下　お酒を造る者にとって最もうれしいのは、飲んでいただいた方から「おいしいね！！」と言われる瞬間です。でも、自分一人ではできない。いろんな人たちとの出会いがあり、語らいがあり、そんな経験が時間をかけて私の中で発酵して血や肉となり、一体化して良いお酒ができる気がします。人との出会いが刺激になることが多いですね。

加藤さんの最新ミニアルバム「愛を耕すものたちよ」のカバーデザインは壁画家・田村能里子さんの作品。その壁画の前で談笑する木下社長と加藤さん
撮影協力：日本橋髙島屋（5階時間食堂）

加藤　それは歌も同じです。今回、喜多屋さんから機会をいただいて、お酒の名前を考えました。それが「百歌百会」です。最初は50年間の出会いを表現したつもりでしたが、よく考えていたら、全ての出会いが歌であり、歌が出会いを運んで来てくれる。そうであるならば、私の胸の中にはまだまだ歌にできていない出会いがたくさんあって、これから歌にしたい出会いの多さに気付いたのです。同じタイトルの歌もいま、作っています。

木下　もう一つ、歌もお酒も、最終的に受け止めてくれる人がいて初めて出来上がるところも共通ですね。自分の仕事の先に笑顔があるからこそ、酒造りが楽しくてしょうがない。だから義務感ではなく、情熱を傾けることができるんです。

加藤　確かにそうですね。私は練習よりコンサートの方が出来上がるんです。観客がいて歌が出来上がるんです。言葉を交わさなくても、目が合った瞬間に通じ合う。それが大きな喜びです。

木下　私たちの仕事にはここまでで良いということはありません。だから引退もない。これからもお互いに人に「和み」を届けていきたいですね。

加藤登紀子50周年記念ボトル「百歌百会」
（純米大吟醸喜多屋50%磨き）

50周年開幕!!
加藤登紀子
ほろ酔いコンサート2014
S席完売御礼！ A席発売中

喜多屋が協賛する同コンサートが12月7日(日)16時30分～キャナルシティ劇場(福岡市博多区住吉1-2-1)で開催される。第1部では1960、70、80年代の各代表曲、第2部で21世紀の曲、合わせて約30曲を聴かせる。コンサートの最後には最新ミニアルバムに収録した「愛を耕すものたちよ」を予定。会場では喜多屋のお酒も振るまわれ、歌声とともに酔いしれた。チケットの問い合わせは、BEA ☎092-712-4221へ。

企画・制作／西日本新聞社広告局